

アメリカの奴隷制度と南北戦争

本 城 精 二

序

アメリカ合衆国はヨーロッパと違って王国でもなく、貴族もない国である。また建国当初から上下の身分階級もなく、すべての人民が身分上対等の国として、自由を求めた移民が作った国である。歴史は浅いが、民主主義の原型が始まった国というイメージがある。「メイフラワー号の盟約」(Mayflower Compact)が民主主義の原型であると言われている。1620年にメイフラワー号でプリマス(Plymouth)にやってきた人々が上陸する前に船上で交わした約束が「メイフラワー号の盟約」である。その盟約によって、何かを決めるときみんなで意見を出し合って議論をし、そして最終的には多数決で決めるという民主的な考えが定着した。ただし多数決に加わるのは成人の男だけである。その意味では未熟ではあるが、当時としてはヨーロッパに比較して、進んだ民主主義であった。

確かにアメリカは民主主義の国である。しかし奴隷制度のあった国でもあり、民主主義との関わりから見れば非人道的なイメージもある。南北戦争の後、奴隷制度は法的には廃止された。南北戦争により黒人問題の第一歩を踏み出したことは事実である。しかし奴隷制度の廃止は黒人問題解決の第一歩に過ぎない。その後たくさんの難問が待ち構えていたのである。

独立以前、北米大陸の植民地は大西洋に面した地域に限られていたが、独立後各植民地が州になり、その後内陸部に次々と新しい州が成立した。北部には農村部もあったが都市化が進んだところでは徐々に商工業が発展していった。一方南部は農業中心に発展し、さらに内陸部に新しい州が誕生し、プランテーションが拡大されて綿花が栽培されるようになった。このように北部と南部は性格の異なる州の集まりとなった。

南部と北部は政治的にも経済的にも異なっていた。社会構造も違うため何か

と対立することが多かった。独立後北部は徐々に工業化し、工業が発達すると自然に商業も発達し、商業と工業が相乗的に発達した。ヨーロッパ各国と工業製品の貿易で商工業が発展していった。しかしヨーロッパに比較して工業化が遅れていたから、関税を高くして保護貿易という政策をとらねばならなかった。アメリカの製品は質的にもヨーロッパより劣っていたから、競争力を優位にするためには輸入するヨーロッパの製品に高い関税をかけるという保護貿易に頼らざるを得なかった。

一方南部は綿花を栽培するプランテーション経済であった。イギリス中心の自由貿易をし、綿花の需要もあり貿易は順調であった。イギリスの繊維産業の発展につれて綿花の需要も増し、綿花栽培中心のプランテーション経済は順調であった。しかし綿花栽培には絶対必要であった奴隷制度が北部と対立する原因となった。また自由貿易を望む南部と、保護貿易を望む北部との間に軋轢が生じ、やがてそれが南北戦争につながった。北部の23州と南部の11州が約4年間戦った悲劇の戦争である。

このようにさまざまな要因が重なって南北が分裂して、内乱が生じた。それが62万人以上の犠牲者を出した南北戦争である。その原因のひとつである奴隷制度を中心に試論を述べてみたい。

I. 奴隷制度と南北の対立

「新世界」と呼ばれていたアメリカに移民が始まったのは17世紀初頭である。アメリカという名前はドイツの地理学者マーチン・ヴァルトゼーミュラー (Martin Waldseemüller) によって、アメリゴ・ヴェスプッチ (Amerigo Vespucci) という探検家にちなんで名付けられていた。しかしヨーロッパでは「アメリカ」と呼ばずに、一般に「新世界」(New World) と呼んでいた。17世紀の初頭に、ヨーロッパから自由を求めて新しい世界であるアメリカへ移民が始まった。最初は宗教的な自由を求める集団や、経済的な自由を求める集団が現在のアメリカ大陸へ移民していった。その頃から北部の植民地と南部の植民地は性格が異なっていた。アメリカの植民地が拡大するにつれて北部的な植民地と南部的な植民地が並行して展開していった。北部は後に商工業中心に発展

していき、一方南部は農業中心の農本主義の道を歩む結果となった。そのため北部では奴隷制度を必要としなかったが、南部では奴隷制度は絶対不可欠な制度として定着した。

ヨーロッパからの移民が現在のアメリカで最初に成功させた植民地は、1607年に建設されたヴァージニアのジェムズタウン（Jamestown）であった。そしてそこは南部の植民地の玄関口となり、次々と移民を受け入れてきた。主に農業中心に植民地は拡大していった。そして南部の農業に不可欠なものは労働力としての黒人奴隷であった。1619年に20人の黒人が奴隷としてヴァージニアに連れてこられた。これがアメリカ最初の黒人奴隷であった。移民は自分の自由意思でアメリカへ渡ったが、黒人は自分の自由意思ではなく、無理やり連れてこられたのである。この自由意思の有無という点に最大の差異がある。奴隷制度について考えるとき、黒人は自分の意思で移民したのではなく、強制的に連行されたという事実を根底に置いておく必要がある。そして南部の植民地が拡大し、同時に農地が拡大するにつれ、ますます多くの労働力として黒人奴隷が必要となり、さらに奴隷が輸入されるようになった。綿花栽培が拡大されるようになり、南部のプランテーション経済の繁栄は黒人が奴隷として働かされた、いわゆる犠牲によって支えられたと言える。

大西洋に面したアメリカ大陸各地に植民地が建設され、それらが徐々に拡大されるにつれて、ヨーロッパからの移民が増大し、夢を求めた移民がさらに植民地を拡大していった。しかし新天地と思ったアメリカは必ずしも安住の地ではなかった。移民たちにとっては数限りない苦難があった。アメリカ北部の冬は非常に寒冷で、祖国のヨーロッパでは想像もつかなかった厳しい自然との戦いであった。冬の寒さ以外にも苦労は耐えなかった。祖国のヨーロッパにはなかった疫病、食料の入手など苦労の種は次々と生じていた。生活面で手助けしてくれる親切な原住民もいたが、多くの場合原住民とのいさかきがあり、ときには原住民との戦闘など、まさしく苦難の連続であった。そんな厳しい生活を余儀なくされた苦難の植民地時代ではあったが、ヨーロッパでは望むことすらなかった夢を持って新世界を目指して移民が続いた。宗教的にも経済的にも夢の持てるアメリカへ移民して、ヨーロッパより少しでもベターな生活を望んでいた。ヨーロッパにはない自由を求めて、移民は絶えることなく続いた。アメリカは自由の国である。自由という夢を求めてヨーロッパからの移民は続いた。

その結果、アメリカ各地の植民地に住む人口は増大していった。祖国よりも厳しい自然環境ではあるが、さまざまな困難を克服しながら苦難の生活をしつつ植民地の時代は進んだ。

植民地として進展するうちに、18世紀になるとイギリス本国との間にさまざまな政治的な問題が起こり、解決策として独立以外ありえない状況に追い込まれていった。さまざまな対抗策をとった後、結局植民地としてのアメリカは独立する道を選んだ。イギリスの植民地であるアメリカが独立するということは、イギリス本国と戦争になることを意味していた。そのことを覚悟の上で植民地の住民は独立の方向に動いた。各植民地の代表が集まり、大陸会議（Continental Congress）を開き、独立の準備が進んだ。その結果アメリカは1776年に独立を宣言した。13の植民地が州になり、アメリカ合衆国が誕生した。

イギリスがアメリカの独立を認めたのは1783年のパリ条約においてであった。しかしアメリカ側では独立宣言をした1776年7月4日が独立記念日であり、アメリカ合衆国の誕生日であると考えられている。その独立宣言の一部を引用してみよう。

We hold these truths to be self-evident, that all men are created equal, that they are endowed by their Creator with certain unalienable Rights, that among these are Life, Liberty, and the pursuit of Happiness.¹

この中に崇高な民主主義の理念が要約されている。黒人とか奴隷制度に関する表現は一切なく、ただ理想的な民主主義が謳われている。自由、平等そして幸福の追求を謳っているにもかかわらず、現実のアメリカ社会では奴隷制度があり、黒人奴隷には自由も平等も人権もなく、幸福の追求などあるはずもない。そう考えると独立宣言はいったい何だったのか。現実を無視した机上の空論であったのか。アメリカには奴隷制度があるにもかかわらず、理想的な民主主義の追求を謳っているのである。奴隷制度との関わりを考慮すると、独立宣言には民主主義の大きな矛盾がある。理想と現実との間の大きな矛盾である。

独立に至るまでに奴隷制度に問題があると告発する動向はあった。独立宣言を準備しているときにも奴隷制度が独立宣言の内容と矛盾するという指摘はあった。しかし独立することを優先させるために、奴隷制度のことは敢えて避

けざるを得なかった。それはやむを得ない選択だったと言えるかもしれない。

独立が実現した後も奴隷制度の問題はくすぶり続けた。特に北部では奴隷制反対の声が高まり、奴隷を解放しようという動きがあわただしくなった。そして北部諸州では奴隷制度を廃止したり、奴隷を自由にする政策をとった。そのような州の中でもマサチューセッツ州の最高裁判所はいち早く1783年に奴隷制度を憲法違反と宣告しているのである。

American Eras: Development of a Nation 1783-1815 の1783年の項目に“The Massachusetts Supreme Court abolishes slavery and declares it a violation of the state constitution.”²というように奴隷制度の廃止を明言しているのである。

同書の1784年の項目には、コネチカット州とロードアイランド州でも“Connecticut and Rhode Island pass gradual emancipation laws.”³とあるように奴隷を徐々に解放するという法律を定めているのである。そのような背景には奴隷制度に反対する世論が高まっていたと推定される。その数年前の1779年の項目には、“Slaves in Connecticut petition the state for freedom.”⁴というようにコネチカットの奴隷自身が自由を請願しているのである。これは推測の域を出ないが、このような行動が許されるということは既に奴隷を自由にしてやろうという風土ができていたのかもしれない。

ニューイングランドでは早くから奴隷制度に反対の声が上がっているのである。ニューヨーク州でも早くから奴隷制度に反対する声が上がっていた。ニューヨーク州では1785年に奴隷制度を違法とした。このように先進的な州では奴隷制度に反対の声が上がっているのである。国民にあらゆる自由を保障した憲法修正箇条第1条が1791年に確定する前から、奴隷制度に反対の声が出ているのである。そして *American Eras* の1799年3月29日の項目に“The New York state legislature passes a gradual emancipation law.”⁵というように、奴隷を徐々に開放することを決定しているのである。黒人には選挙権が与えられていないから白人と同等であるとは言えないが、当時の社会状況を考えれば奴隷制度の廃止という考えは画期的なことであると言えるだろう。

独立とともに合衆国憲法が制定された。その後、憲法修正箇条が加わり、その第1条に国民は自由であると規定されている。アメリカが誇りとする自由が高らかに謳われているのである。あらゆる自由が保障されていることが次のように示されている。

Congress shall make no law respecting an establishment of religion, or prohibiting the free exercise thereof; or abridging the freedom of speech, or of the press; or the right of the people peaceably to assemble, and to petition the Government for a redress of grievances.⁶

憲法修正箇条第1条から10条までは「権利の章典」(Bill of Rights)と呼ばれ、1791年に確定している。この第1条には、この引用の文言が示す通り国民には宗教、表現、集会をはじめ、あらゆる自由が保障されているのである。自由こそアメリカが誇りとする理念である。北部のいくつかの州では既に黒人を自由にするべきという決議をしているが、アメリカにいる大部分の黒人は依然として奴隷のままである。これは民主主義国家であると、独立宣言で明言しているアメリカの重大な問題である。独立の時点では黒人は人間とみなされていないのである。独立直後のアメリカではほとんどの黒人は奴隷であり、憲法の規定する人間とは認められていないのである。そして憲法修正箇条の第1条が確定した後ではあるが、上述した通り、ニューヨーク州では1799年奴隷を漸進的に解放することを決定しているのである。

ニューイングランドの各州やニューヨーク州より少し遅れてペンシルヴァニア州では1826年に逃亡奴隷法を無効とする法令を制定している。逃亡奴隷法とは1793年の法律で、逃亡している奴隷を持ち主に返さなければならないという連邦法である。この連邦法は後に違憲判決が出されている。

商工業中心に発展しつつある北部の各州では新たな移民を労働力として利用したため奴隷を必要としなかった。新しい移民自身が職を求めていたからである。新しい土地で生きるためには働かねばならないから、彼らが労働者であった。そのために商工業者は奴隷の労働力を必要としなかった。

法的あるいは政治的なものだけでなく、市民感覚においても奴隷制度に関して南部と北部との間に格差が見られるようになった。南部では奴隷の束縛が強化され、それに対して反発が起き、暴動も起こっている。そのためにさらに束縛を強化する傾向もあった。

独立以後北部では徐々に奴隷制度を廃止したが、南部に存続する奴隷制度にも反対する声が高まり、1832年には奴隷制反対協会がニューイングランドに結

成された。そしてその翌年の1833年にはアメリカ奴隷制反対協会も発足している。これは南部の奴隷制度に反対する北部の声である。南部に堅持されている奴隷制度に対して北部の市民が強く反対していることを表すものである。奴隷制度に反対する人たちが秘密の組織を作り、密かに南部の奴隷を自由州に逃亡する手助けもした。いわゆる「地下鉄道」(Underground Railroad)である。奴隷制反対の動きは「地下鉄道」という強行な行動にまで至っていた。奴隷を自由州へ逃亡させるという、この秘密の組織は南北戦争の始まるまで密かに続いていた。

独立後1790年に最初の国勢調査が行われた。それによれば総人口3,929,214である。⁷ さらにそれを記した同じ書物によれば黒人の数に関して次のことが注意書きされている。

1820年までは(黒人に関しては)性別の集計は行われていない。黒人の男女合計した数値は以下の通りである：1790年 = 697,681；1800年 = 1,002,037；1810年 = 1,377,808。全奴隷人口は以下の通り：1790年 = 697,681；1800年 = 893,602；1810年 = 1,191,362；1820年 = 1,538,022；1830年 = 2,009,043；1840年 = 2,487,355；1850年 = 3,204,313；1860年 = 3,953,760。⁸

1790年の第1回国勢調査によれば黒人は全員奴隷であることを示している。白人の数も黒人の数も国勢調査をするたびに増加している。さらに同書によれば南北戦争開始の前年1860年には男性の総人口が16,085,204で、そのうち白人が13,811,387、黒人が2,216,744。女性の総人口が15,358,117で、そのうち白人が13,111,150、黒人が2,225,086(男女とも、インディアン、日本人、中国人等いわゆる「その他の民族」も総数に入っている)ので、白人と黒人の合計と総人口は一致しない)。男女ともに総数、つまりアメリカに住む総人口は年を経るにつれて増加しているし、白人も黒人も増加していることは明白である。しかも奴隷は徐々にではあるが解放されているにもかかわらず、黒人奴隷の数が増大していることは意外な事実である。

第1回国勢調査の段階では黒人全員が奴隷であった。そして南北戦争勃発の前年の1860年の国勢調査によると、黒人の総数は4,441,830である。そのうち奴

隷は3,953,760であり、自由黒人は488,070である。約9割の黒人は依然として奴隷である。黒人の総数の1割強が自由になっているが、それは北部の黒人である。大多数の黒人が奴隷であるという実態を裏づけている。

独立以後13州の西側すなわち内陸部に新しい州が次々誕生し、北部の州も南部の州も数が増え、合衆国の実質的な領土は拡大の一途であった。それは西へ西へと領土を広げるいわゆる西部開拓である。南北戦争が始まるまでにミシシッピ河の西側に接する地域がすでに州に昇格し、開拓の最前線は西へ西へと向かっていた。州の数が増大するという事は合衆国における人々の生活圏が増大するという事である。

南部の農業が拡大するにつれて、さらに黒人奴隷の数は増していった。奴隷の労働力を必要とする綿花栽培が一時衰退しかけたことがあった。人力では生産効率が悪く大量生産ができないため、商業ベースに乗らないからであった。しかし大量生産のできる画期的な農業機械の発明により綿花栽培はさらに拡大され、輸出作物としての重要性が増大し、ますます商業ベースに乗る作物となった。1793年イーライ・ホイットニー (Eli Whitney) が種から綿繊維を取り出す「綿繰機」(cotton gin) という機械を発明した。これにより廃れかけていた綿花栽培がさらに拡大していき、それにつれてますます多くの奴隷が必要とされるようになった。イギリスの繊維産業が好調であるお陰で、貿易も順調に進み、南部の綿花栽培は経済的に南部社会を潤す基幹産業であった。南部にとって綿花栽培は最重要課題であり、それを支える奴隷制度は絶対に必要であった。

連邦議会は1807年奴隷輸入の禁止を議決し、この法令は1808年1月1日から施行された。黒人奴隷を必要とする南部にとっては不都合なものであり、またひとつ南北の対立が深まることになった。黒人を自由にすべきという北部の主張と、奴隷制堅持の立場をとる南部との対立は決して縮小されることはなく、むしろ拡大傾向にあった。黒人も人間であるという人道的な立場をとる北部と、黒人は人間ではないという見解をとる南部の主張は対立した。その対立が南北戦争につながるのである。

奴隷制度をめぐる解釈について、キリスト教の内部においてすら南北間の対立が起こっていた。マーク・トウェイン (Mark Twain) の『ハuckleberry・フィンの冒険』(The Adventures of Huckleberry Finn, 1885出版) の中にも黒人奴

隷について、黒人は人間ではないという奴隷州特有の風潮が皮肉を込めて語られている。この作品は南北戦争後に執筆されているが、作中では1840年代後半の奴隷制度を容認していた地域を背景としている。具体的に言えばミズーリ州とアーカンソー州である。奴隷制度について南北の対立が激化している時代背景を巧妙に描いている。また作者の自伝の中に、「小学生の頃は（中略）奴隷制度というものに何か問題点があると考えてもみななかった」⁹と記されているように何の疑問も抱くことなく、当然のこととして受け止めていたのである。しかし後年になってトウェインは自由、人権、奴隷制度などの問題意識を持つようになり、「悲劇が起こるたびに、それをすべて自分の問題として心に受け止め、その意味を心に刻み込んでいった」¹⁰と記しているのである。黒人に悲劇が起こるたびに心が痛んだことを自伝に記している。そして『ハック・フィン』の中では人間の自由の意義を高く宣揚している。奴隷制度が敷かれていた時代の南部では、黒人に自由などあるはずもない社会背景を描きながら、中心人物であり、語り手でもあるハックを通して、皮肉を込めて自由の意義を高らかに示しているのである。

南北が対立する中に政治的な妥協もあった。妥協することによって、かろうじて平穏な南北関係が維持できたのである。1820年にメインが州として連邦加入するとき、ミズーリ協定（Missouri Compromise）が行われた。メインを自由州とする代わりに、その翌年に連邦加入するミズーリでは緩やかながらも奴隷制度を認めるというものである。それは奴隷制度に反対する北部の市民と、奴隷制度を堅持しようとする南部の市民との間の妥協案であった。

北部で奴隷制反対の声が高まるのに対して、南部では奴隷制度を堅持しようという動きが起こっている。1835年にはジョージア州とサウス・キャロライナ州で奴隷解放運動を禁止している。農業中心の南部において奴隷制度は絶対不可欠な制度であり、奴隷制度は神様が特別に嘉された神聖な制度であると都合よく解釈していた傾向がある。このことは上にも触れた通り、トウェインが自伝に記している。トウェインが生まれ育ったミズーリは南部ではないが一応奴隷州である。少年時代トウェインは奴隷制度について「正当であるだけでなく、正義に適っており、神聖であり、神が特別に嘉したもうた制度である」¹¹と教会で教えられていたと記しているのである。

南北戦争に至るまでに奴隷制反対という北部の世論を大きく動かしたのはス

トー夫人 (Harriet Beecher Stowe) の『アンクル・トム的小屋』 (*Uncle Tom's Cabin*) である。1852年に出版されたこの小説は1年間に30万部以上売れ、多くの読者の感性に訴えたのである。どの程度の売れ行きか、次の文が示している。“Within a year it had sold 300,000 copies—and by the end of the decade, perhaps a million.”¹² その当時100万冊以上売れるということは読者に非常に高く評価された結果であると言ってもよいだろう。奴隷制度がいかに非人道的なものであるかを読者に訴え、その結果北部で奴隷制度に反対する気運は一気に高まったと評されている。後にエイブラハム・リンカーン (Abraham Lincoln) はストウ夫人に会ったとき、「あなたがあの偉大な戦争を起こしたご夫人ですか。」と言わしめたという有名なエピソードがある。それ程『アンクル・トム的小屋』は読者に大きな影響を与えた名作である。読者の感性に訴え、戦争を起こしても奴隷制度を廃止しようという気持ちを多くの北部人に起こさせたのである。北部の市民を振るい立たせるという、極めて大きな影響を与えたことはアメリカ文学の世界でも高く評価されている。

奴隷解放を実現したリンカーンはアメリカ史上で最も偉大な大統領であると評価されている。ケンタッキーの極貧の家庭に生まれたリンカーンは、勉学に向けて興味を刺激する書物の類は聖書以外何もなかった、といわれるぐらい教育には縁がない家庭環境に生まれ育った。しかし後年独学で法学を修めて法律家になり、イリノイ州で弁護士として活動した。

奴隷制度に反対だったリンカーンは反奴隷勢力を結集した共和党に入り、イリノイ州各地で奴隷制反対の演説をした。1858年イリノイ州で上院議員候補に指名され、対立候補とリンカーン＝ダグラス論争が始まった。対立候補のステーブン・ダグラス (Stephen A. Douglas) は現職の上院議員であり、過去に重要法案を通過させた実力派大物議員であり、知名度は非常に高く、どっしりとした貫禄ある風貌も手伝って上院議員に当選した。リンカーンは奴隷制反対を選挙戦の中心に運動を展開したが、上院議員選には敗北した。しかし対立候補のダグラス上院議員と州内各地で論争した結果、リンカーンはイリノイ州だけでなく、アメリカ全土で広く反奴隷制の政治家として知れ渡った。その結果、2年後の1860年の大統領選挙では共和党がリンカーンを候補に指名した。一方民主党は1860年6月の民主党大会でダグラスを大統領候補に指名した。しかし大統領選挙の頃までに知名度の高まっていたリンカーンは11月6日の選挙でダ

グラス候補を破り大統領になることが決まった。

反奴隷制の人気の高いリンカーンが大統領になることが決まって以来、南部諸州の動きがあわただしくなった。連邦離脱し、南部連合（the Confederate States of America）結成の動きである。南北戦争が始まる前年の1860年12月20日まずサウス・カロライナが連邦離脱を宣言した。その後1861年になって次々南部の州が連邦を離脱し、南部連合が結成され、ジェファーソン・デイヴィス（Jefferson Davis）が南部連合の大統領に就任した。

南部の奴隷州がすべて一丸となって北部に対抗したのではなかった。当時奴隷州でありながら連邦離脱しなかった州は5州ある。奴隷制度をとってはいるが、敢えて連邦軍と戦う意思はない中間に位置する州である。南軍が1861年4月にサウス・カロライナにある連邦軍のサムター砦（Fort Sumter）を攻撃したのが南北戦争の始まりである。その前に、すなわち南北戦争が勃発するまでに連邦離脱した7州と、それ以後に離脱した4州、合計11州が南軍である。南北戦争勃発前後の動向から、奴隷州を次の3つの部類に分けることができる。

①ひとつは、南北戦争が実際に開戦する前に連邦を離脱し、南部連合を結成した州の集まりである。サウス・キャロライナ（1860年12月20日離脱＝以下同じ）、ミシシッピ（1861年1月9日）、フロリダ（1861年1月10日）、アラバマ（1861年1月11日）、ジョージア（1861年1月19日）、ルイジアナ（1861年1月26日）、テキサス（1861年2月1日）。これら7州が、南部連合を結成した最初のグループである。

②二つ目のグループは南北戦争開戦後、連邦を離脱し南部連合に加わった州である。これらはヴァージニア（1861年4月17日）、アーカンソー（1861年5月6日）、ノース・キャロライナ（1861年5月20日）、そしてテネシー（1861年6月8日）である。これら①と②の州が南軍である。

③3つ目のグループは「ボーダー奴隷州」（border slave states）と言われる州である。5州あるがミズーリ以外は一応地理的には南部である。これらの5州は奴隷州でもあるが、連邦から離脱しなかった州である。それはケンタッキー、ウエスト・ヴァージニア、メリーランド、デラウェアの4州である。そして地理的には南部ではなく中西部に位置づけられているミズーリは奴隷州であるが、連邦離脱しなかったので「ボーダー奴隷州」のひとつに分類される。これらの5州がこの部類である。

リンカーンが大統領就任式に臨むまでに南部の7州が連邦を離脱し、南部連合を結成した。南部の奴隷州の多くは農業を維持するために奴隷制度の存続は絶対に必要であると信じていたからである。そして1861年3月4日リンカーンは合衆国の大統領に就任し、北軍を統率する最高指揮官としての極めて重い責任を担うこととなった。その後南北戦争が勃発した。

南北戦争は“Civil War”とも“War between the States”とも呼ばれている。一国内で同じ国民同士の戦いである市民戦争である。同じ国の人々同士が、時には親族や友人を敵として戦わねばならない悲劇の戦争の始まりである。奴隷制度が南北戦争のすべての原因ではないが、アメリカは南部と北部に分裂して、4年間の市民戦争が始まった。

II. 南北戦争の推移

以下、南北戦争の経過について *American Eras: Civil War and Reconstruction, 1850-1877* の“The Civil War”¹³から主要な項目を抜粋して開戦以後の対戦の推移を年月順に示してみよう。文章にするよりも、項目別に並べるほうが分かりやすいであろう。

[1861年]

- 4月12日 サウス・カロライナ州チャールストン港（Charleston Harbor）にある連邦政府の要塞を南軍の兵士が攻撃。これにより戦争が開始した。
- 4月15日 リンカーン大統領は75,000人の3か月間の志願兵を呼びかけた。この時点では黒人の志願兵は拒絶した（奴隷解放令の予備宣言以降には逆に黒人の加勢を期待した）。
- 4月20日 R. E. リー（Robert E. Lee）は北軍を離任し、南軍に加わった。
- 5月3日（戦争拡大のため）リンカーン大統領はさらに42,000人の志願兵と18,000人の水兵を募集した。
- 7月4日 リンカーンはさらに400,000人の新兵を募集した。各地の戦いで死傷者がでたが、初期の頃はまだその数は小さかつ

た。

10月21日 ヴァージニア州リースバーグ (Leesburg) 近くで起こった戦いでは北軍が敗北した。リンカーンの親友は戦死した。北軍の死傷者は1,000人以上であった。それに対して南軍の死傷者は100人未満であった。

[1862年]

2月6日-16日 テネシー州ヘンリー砦 (Fort Henry) とドネルソン砦 (Fort Donelson) の戦いで北軍が勝利した。この功績により指揮をとっていたグラント (Ulysses S. Grant) は少将 (major general) に昇進した。

4月25日 ニューオーリンズは陥落し、北軍が勝利した。

6月6日 南軍はテネシー州メンフィス北部で北部軍の海軍に降伏し、北軍の勝利。

8月28日-30日 ヴァージニア州ブルラン (Bull Run) の戦いで南軍は北軍を打破した。

9月22日 リンカーンは「奴隷解放宣言」の予備宣言を公表した (事前に関僚には7月に知らせていた)。

9月27日 ニューオーリンズで初めて公式の黒人の部隊が北軍のものとして編成された。その部隊は “First Louisiana Native Guard Infantry” と名づけられた。

[1863年]

1月1日 リンカーン大統領はかねてより準備していた「奴隷解放宣言」 (Emancipation Proclamation) を発した。ポーター州 (ミズーリ、ケンタッキー、メリーランド、そしてデラウェア) と既に北軍の管理下にある敵であったエリアを除いて、この宣言によって南部の奴隷を自由にする、というものである。

1月25日 マサチューセッツの知事は黒人を徴兵する許可を得て、マサチューセッツ第54部隊が初めて北部出身の黒人からなる部隊となった。この部隊が後に7月18日にサウス・カロライナで熾烈な

戦いをして、大きな痛手を受けたが、そのことを現場にいた報道陣は新聞や雑誌で大きくたたえる報道をしていたことが記録されている。

- 5月23日 ルイジアナ州のハドソン港（Port Hudson）での戦いが黒人部隊のかかわった最初の大きな戦闘となった。
- 6月3日 南軍のリー（R. E. Lee）将軍は北部へ侵攻するために、ヴァージニア州北部に駐留していた部隊をメリーランド州へ移動させることを決断した。
- 6月16日 リー将軍は実際にヴァージニア州の部隊を、ポトマック川（the Potomac River）を越えメリーランド州に進めた。
- 7月1日－3日 ペンシルベニア州ゲティスバーグ（Gettysburg）の戦いは非常に熾烈な激戦となり、一応北軍の勝利ではあったが、この戦闘で南軍は北部へ進撃する力が残っていなかった、と言われるほどの激しい戦闘であった。南北両軍に多大な犠牲者がでた。両軍合わせて50,000人の死傷者であった。南軍は17人の将官を失い、戦力の3分の1を失い、そのためにヴァージニア州に撤退せざるを得なかった。
- 7月4日 ミシシッピ州ヴィックスバーグ（Vicksburg）は6週間の戦いの末ユリシーズ・S. グラント（Ulysses S. Grant）の率いる北軍の勢力に負け、陥落した。そして29,000人以上の南軍兵士が捕虜となった。
- 9月19日－20日 ジョージア州チッカモーガ（Chickamauga）の戦いで南北両方の死傷者は35,000人に達した。その中にはリンカーンの義理の弟で南軍の将官であったベン H. ヘルム（Ben Hardin Helm）も含まれている。
- 10月16日 リンカーンは U. S. グラントを西部方面隊の総司令官（all Union forces in the west）に任命する。
- 11月19日 リンカーン、ゲティスバーグで演説（the Gettysburg Address）。

[1864年]

- 1月18日 南部連合大統領 J. デイヴィス（Davis）は18歳から45歳（後に17

歳から50歳に変更)の男子兵士の南軍への徴兵を発表。

- 2月1日 リンカーン北軍のために500,000人の追加志願兵を呼びかけた。
- 3月9日 リンカーン U. S. グラントを中將 (lieutenant general) に昇格させ、北軍の総大将 (general-in-chief of all Union armies) に任命。
- 5月5日 - 6日 南北軍の戦いヴァージニア州の森の中の勝ち負けのつかない戦いにより多数の死傷者がでた。両軍で25,000人以上。
- 5月8日 - 12日 グラントはリーを追いヴァージニア州のスポッツルヴェニア (Spotsylvania) で5日間の戦い、引き分けに終わる。
- 6月1日 - 3日 ヴァージニア州 “Cold Harbor” と呼ばれる地の戦いで両軍に多大な死傷者を出す。この後1ヶ月の間に北軍の死傷者は50,000人、南軍は32,000人に達した。
- 9月2日 アトランタ陥落。南軍は北軍に屈服。

[1865年]

- 3月3日 合衆国大統領リンカーンはグラント將軍に、南軍のリー將軍が降伏するまでは南軍の申し入れている和平交渉を拒絶するように命じた。
- 3月13日 南部連合の大統領 J. デイヴィスはアフリカ系アメリカ人に南軍に志願するように法案に署名した。
- 4月2日 南軍のリー將軍は南部連合大統領に南部の政府をリッチモンド (Richmond) から他所へ移すように進言した。
- 4月3日 北軍は戦うことなくリッチモンド (Richmond) を制圧し、翌日リンカーン到着。
- 4月6日 ヴァージニア州 “Saylor’s Creek” と呼ばれる所の戦いで南軍は総戦力の3分の1を喪失。
- 4月9日 リー將軍ヴァージニア州アポマトックス (Appomattox) で正式に降伏した。
- 4月18日 J. W. ブース (John Wilkes Booth)、リンカーン大統領を暗殺。
- 4月18日 南軍のジョンストン (Joseph E. Johnston) 將軍も北軍のシャーマン將軍 (William T. Sherman) にノースキャロライナのダーラム (Durham) で正式に降伏し、南北戦争は終結した。

以上のように南北戦争は推移した。最初は南軍のほうが優勢であったが、中頃から趨勢が変わり、北軍が優勢になり、結局北軍の勝利で戦争は終結した。しかし北軍の最高指揮官であるリンカーン大統領は無念にも、その後の改革を確認することなくこの世を去っていた。

独立以前から、北部と南部は異なった発展をした。そして独立以後、政治的、経済的さらに社会構造の違いから、南北の間に亀裂を生じ対立が徐々に激化し、リンカーンが大統領に就任するまでにアメリカは南北に分裂する寸前まで状況は悪化していた。そこでリンカーンには大統領就任以前から2つの狙いがあった。ひとつは南北の間に亀裂の入ったアメリカを再統一することであり、もうひとつは南部の奴隷制度を廃止することであった。たくさんの難問を抱える中で南北の中間に当たる諸州、つまり地理的には南部であり、奴隷制度を容認しているが、北部に好意的な州をどうするかがリンカーンの苦悩の種であった。6月に分離したウェスト・ヴァージニアをはじめ、奴隷制度をとってはいるが、どちらかといえば北部寄りの立場をとるメリーランド、デラウェア、ケンタッキー、ミズーリ（ミズーリは地理的には中西部に分類される）、これらの州をどうするかという問題であった。リンカーンはこれらの州が南部連合に加わらないことを望んでいた。事実、これらのボーダー州は戦争開始後も連邦離脱はしなかった。

1862年9月に奴隷解放の予備令を出していた。そして1863年1月1日、リンカーンは正式に奴隷解放令を出した。南部の黒人奴隷を自由にし、開放するというものである。まだ戦争の最中である。なぜ北部の大統領が南部農園主の所有物である奴隷を勝手に解放するというのであろうか。南部にいる奴隷は南部の農園主の所有物であり、リンカーンが自由にできるものではない。他人の所有物である奴隷を勝手に開放すると公言しても、有効性がないように思われる。しかしこれには重要な意図があった。自由になれるという噂を聞いた南部の黒人奴隷が北部に逃げ込み、そのまま北軍に加勢をしてくれることを期待していたのである。黒人にとっては北軍のためというより、自分たちの自由のために戦うだろう。そういう期待感があったから、リンカーンは戦争の最中に奴隷解放令を出したのである。リンカーンの狙いは見事に当たった。多数の奴隷が北部に逃げてきて北軍に加勢したのである。

戦争の最中ではあったが、1864年11月大統領選挙があり、当然リンカーンは

合衆国大統領として再選された。翌年1865年3月4日、リンカーンは2期目の就任式をし、その1ヶ月後4月9日、南軍のリー将軍がヴァージニア州アポマトックスで北軍のグラント将軍に全面的に降伏したのである。

その後リンカーン個人には悲劇が待っていた。1865年4月14日、フォード劇場で観劇中にジョン・ブース（John W. Booth）の凶弾に倒れ、不幸な最期となってしまった。リンカーン大統領は戦後の改革を確認することなく、暗殺されてしまったのである。

その後4月18日、南軍のジョンストン将軍も北軍のシャーマン将軍にノース・キャロライナのダーラムで正式に降伏したのである。これにより南北間の戦闘行為はすべて終わった。南北戦争の終結である。北軍の勝利で終わった戦争ではあるがすでにリンカーンの死後である。

リンカーンの後をジョンソン副大統領（Andrew Johnson）が引き継ぎ黒人問題は次の段階へと進んだ。北軍の勝利により奴隷制度は憲法修正第13条（1865年確定）第1節により廃止された。

結論

南北戦争が北部の勝利で終結したことにより、法的には奴隷制度は存在しないことになった。しかし奴隷制度自体の廃止は黒人問題の第一歩に過ぎないのである。黒人は解放されても何の資産も富もないため、自由が与えられたとしても、どうやって生活していくのか。現実には多数の難問が山積していた。それは自由になった黒人自身が解決すべき問題なのか、南部の州政府の問題なのか、誰が解決すべきなのかさえ曖昧な部分もあった。

自由になった後の黒人に関してさまざまな問題が連邦政府の課題として残った。黒人の市民権、選挙権、その他合衆国憲法に定められたさまざまな人権に関する問題が山積していた。さらに分断した南北の統一や、荒廃した戦地の復興も重要な問題であった。山積する黒人に関する問題は1960年代まで尾を引くのである。1960年代に公民権運動により黒人の地位は少しずつ改善されたが、それ以後も黒人問題や他の人種問題は続いている。黒人を含む人種問題は多民族国家であるアメリカの宿命であると言えるだろう。

注

1. Frank E. Osterhaus/ 宮原文夫共著『アメリカ研究入門：多様性の中に見る統一性』 *An Introduction to American Studies: Out of Many, One*, (東京：松柏社、2000), p.111.
2. Robert J. Allison ed., *American Eras: Development of a Nation 1783-1815* (Detroit: A Manly Inc. Book,1998), p. 180.
3. *Loc. cit.*
4. Robert J. Allison ed., *American Eras: the Revolutionary Era, 1754-1783* (Detroit: A Manly Inc. Book, 1998), P. 121.
5. Robert J. Allison ed., *American Eras: Development of a Nation. 1783-1815* (Detroit: A Manly Inc. Book, 1998), p188.
6. Frank E. Osterhaus, *op. cit.*, p.118.
7. 齊藤眞翻訳監修『アメリカ歴史統計・I』、アメリカ合衆国商務省発行、(東京：原書房、1986), p. 8.
8. *Ibid.*, p. 14.
9. Charles Neider ed., *The Autobiography of Mark Twain* 『マーク・トウェイン』 渡辺利雄訳 (東京：研究社、1975), p. 48.
10. *Ibid.*, p.109.
11. *Ibid.*, p. 302.
12. Tad Tuleja, *American History in Nutshells*, 青山義孝編 (東京：英宝社、2000), p. 52.
13. Thomas J. Brown, ed., *American Eras: Civil War and Reconstruction, 1850-1877* (Detroit: A Manly, Inc. Book, 1997), pp 85-92.

参考資料 (*American Eras* から抜粋)

[1858]

16 June. Abraham Lincoln, nominated for the Senate by Illinois Republicans,

delivers his “House Divided” speech.

21 Aug. The first seven Lincoln-Douglas debates is held in Ottawa, Illinois.

15 Oct. The last Lincoln-Douglas debate is held in Alton, Illinois.

[1860]

18 June Reassembled Democratic convention nominates Stephen A. Douglas for president.

6 Nov. Abraham Lincoln is elected president.

20 Dec. South Carolina declares secession from the Union.

[1861]

9 Jan.- 1 Feb. The remaining states of the Lower South secede.

9 Feb. Jefferson Davis is elected president of the Confederate States of America.

4 Mar. Abraham Lincoln is inaugurated as president of the United States.

17 Apr.-20 May Virginia, Arkansas, Tennessee, and North Carolina secede from the Union.

[1862]

22 Sept. Lincoln publishes the preliminary Emancipation Proclamation.

[1863]

1 Jan. The Emancipation Proclamation is declared in effect.

[1864]

8 Nov. Abraham Lincoln wins reelection as president of the United States of America.

[1865]

4 Mar. Lincoln is inaugurated for a second term.

9 Apr. Robert E. Lee surrenders his army at Appomattox Courthouse, Virginia.

14 Apr. Lincoln is assassinated at Ford’s Theater by John Wilkes Booth; Andrew

Johnson becomes president.

[1866]

13 June Congress approves the Fourteenth Amendment to the Constitution.

[1868]

22-25 June Alabama, Arkansas, Florida, Georgia, Louisiana, North Carolina, and South Carolina are readmitted to the Union by Congress.

3 Nov. Ulysses S. Grant is elected president.

[1870]

30 Mar. The Fifteenth Amendment is declared to be in effect.